

## <各種報告(海外研修報告)>

### マッコーリー大学におけるテニスコート活用法 とオーストラリアのテニス事情

高橋 仁大\*

### The management and utilization of Macquarie University's tennis facilities and Australian tennis in general

Hiroo TAKAHASHI

#### Abstract

The following paper is a report based on a visit to Macquarie University in Australia in January 2002. At that time I investigated about the management and utilization of Macquarie University's tennis facilities and about Australian tennis in general.

Macquarie University's tennis courts were operated by the Barclay Coaching Academy, a privately-run members only tennis club. The management of this club was independent from the University. This case has potential as a point of reference for plans for future management issues at our Institute.

Currently there are many highly-ranked players on the international tennis circuit from Australia. It seems evident that the Australian style of coaching and player development are keys to this high level of achievement by Australian players at the international level.

#### はじめに

本学の将来像を考える上で、競技力向上ならびに生涯スポーツの振興に関して、施設・設備の有効な活用法を考えることは急務である。先日示された『新しい「国立大学法人」像について』の中でも、各大学の自己収入の運用についての指摘がなされている。本学の特色である競技力向上と生涯スポーツの振興を推進する上でも、学内施設をいかに活用するかを具体的に検討する必要があるといえよう。

今回、2002年1月11日から18日の日程で、オーストラリア・シドニーの Macquarie University への研修の機会を与えられた。広大なスポーツ施設

を有する Macquarie University におけるテニスコートの有効な活用方法についての調査を行い、本学テニスコートの有効な活用方法についての知見を得ることが一つの目的である。

またオーストラリアはテニス大国の一つとして知られている。特に2001年には男子の国別対抗戦であるデビスカップで準優勝、男子年間ランキングのシングルス一位（ヒューイット）、ダブルスチーム一位（ウッドブリッジ）、さらに女子のツアーチャンピオンシップのダブルス優勝（スタブス）など数々の好成績を残した。このようなオーストラリアのテニス事情についても調査を行い、競技力向上の知見を得ることがもう一つの目的で

---

\*コーチ学講座

ある。

### Macquarie University におけるテニスコートの管理運営について

Macquarie University のテニスコートは同大学のスポーツフィールド内にある。スポーツフィー



図1 スポーツフィールド正門

ルドにはオーストラリアンフットボールグラウンド、野球・クリケット場、ホッケー場が併設され



図2 スポーツフィールド内のクリケット場

ている。また軽食をとれるレストランも備わっている。テニスコートは同大学の Sports Association による管理であるが、実際の運営は Barclay Academy によって行われている。砂入り人工芝コートが12面あり、ナイター設備も全てのコートに設置されている。2002年の4月にはハードコートも新設するとのことであった。

同アカデミーは会員制となっており、平日の日のコート使用料は会員で6ドル(約420円)、会



図3 Barclay Coaching Academy のクラブハウス

員外で11ドル(約770円)、ナイターの使用は会員で11ドル(約770円)、会員外で14ドル(約930円)であった。また週末にはそれぞれ2-5ドルほど高めに設定されている。同大学のキャンパスがシドニーの中心地から車で30分ほどの郊外に位置していることを考えても、かなり安い設定であるといえる。写真のように地元住民がテニスを楽しんでいる光景が数多く見受けられ、特に平日のナイ



図4 テニスを楽しむ大学周辺の市民

ター時は12面のコートが全て埋まってしまうということであった。日本のテニスコートの料金と比較すると、同アカデミーの会員料金は日本の公共のコートと同等であるといえよう。しかし日本ではこれだけのコート数を擁する公共施設はほとんど見受けられない。

同アカデミーには常駐のコーチがおり、プライベートレッスンやテニススクールも常時開講している。また特に日本やフィリピンなどからのテニ

ス留学生を数多く取り入れており、これまでも日本高校選抜チームや九州テニス協会のジュニア遠征が同アカデミーを訪れて、オーストラリア選手との交流試合等を行っている。また現在日本のトップ選手として活躍している寺地選手、中瀬選手も同アカデミー出身ということである。大学内には宿泊施設も完備されている。宿泊施設といっても本学のような「合宿所」形式ではなく、民間のホテル会社による独立した経営がなされている。



図5 大学併設の宿泊施設

またテニスコートにはそういった留学生のための休憩所もあった。これはアカデミーのスタッフによって建てられたということである。



図6 テニスコート横の留学生専用のクラブハウス

私の派遣時にも日本から数名の選手が同アカデミーを訪れていた。月曜日から金曜日まで毎日午前3時間、午後2時間の練習とトレーニングを行っており、ほとんどの選手が「プロを目指している」とのことであった。オーストラリアにこのような

形で留学する理由は、やはり現時点で世界 No.1の選手を輩出している国である、ということが大きいと思われる。

このように同アカデミーは日中や夜間のレッスン開催、外国からのテニス留学生の招聘等多彩な活動を行っている。本学の将来像を考える上でも同大学のような対外的な活動のシステムや海外からの留学生の招聘等を導入することも検討すべきであろう。

また本学のテニスコートは平日の日中は授業以外の利用がなく、授業も週4コマしかないので、ほとんどの時間はテニスコートが「遊んでいる」状態である。鹿児島県全体を見てもこれだけのテニスコート（総コート面数13面、ナイター完備）を有する施設は他になく、レッスンの開催や施設開放等による有効な活用方法を検討する必要があると考える。

今後の独立行政法人化に向けて自主財源の確保を目指すという意味でも、同アカデミーのような形態による有効なテニスコートの活用法を模索する必要があると感じられた。

### オーストラリアのテニス事情と競技力向上のコーチングについて

派遣期間はちょうどグランドスラムの一つであるオーストラリアンオープンの直前であったことから、それに向けてのオーストラリア国内の動向について調査した。

また世界的選手を輩出し続けているオーストラリアの選手育成システムに関する調査を行い、日本テニス協会の目指すシステムとの比較を行った。特に Barclay Academy における実際のコーチングについての調査ならびに指導者との討論を基に、具体的指導方法とオーストラリアにおける選手育成の現状についても資料収集を行った。

### オーストラリアのテニス事情

オーストラリアのテニスを統轄する団体はテニス・オーストラリアであり、オーストラリアンオープンを始めとする各種大会やジュニア育成、テニスの普及・振興に中心的な役割を果たしている。

競技の面から見ると、オーストラリアでは1月は夏にあたり、またプロツアーのシーズンインにあたることから、この時期は毎年オーストラリア国内各地で「サマーサーキット」と題して7大会が行われている。またそれらはグランドスラム大会であるオーストラリアンオープンの前哨戦として位置づけられており、トッププロの多くが出場する。また2002年シーズンにはオーストラリアンオープンやサマーサーキット以外にも、世界へ挑戦するための大会であるサテライトサーキットが2大会、フューチャーズが6大会開かれている。

またこういったトッププロが参加する大会以外にも、ジュニア大会や一般のトーナメントも数多く開催されている。特にジュニア大会では独特のコンソレーションシステム（敗者復活戦）により、早いラウンドで試合に負けてしまった選手もその後さらに数試合行うことができるというような大会もあり、試合を通じてジュニアを育てるといった考えを感じ取ることができた。

派遣期間中にもシドニーでは、サマーサーキットの一つであるアディダス国際という大会が開かれており、最終日を観戦に行くことができた。そ



図7 アディダス国際大会の表彰式（ヒギンス選手のスピーチ）

の大会は2000年のシドニーオリンピックで用いられた会場を使用しており、テニスコートの周囲にもブルなどの施設があった。また同テニスコートは現在ニューサウスウェールズ州のテニスセンターとしての機能を有しており、オリンピック時の施設を有効に活用しているようであった。大会

会場では会場整理を担当している人に年輩の方が多かったのが印象に残った。試合中は満員の観客が思い思いにテニス観戦を楽しんでいるという雰囲気があった。特にポイントとポイントの間に選手に対する声援が盛んに飛ぶので、昔ながらに「静かに観戦する」ことを重視する、日本で行われる大会の雰囲気とは大きく異なり非常に新鮮であった。

またオーストラリアの社会の中でテニスがどのように位置づけられているかという点では、オーストラリアンオープンに向けて、オーストラリア選手を特集した記事が新聞に掲載されていたり、テレビでも連日同大会に関する情報を報道していたことから、同大会が国民的な関心事であることが伺えた。また大会開始後は一つのチャンネルで一日中同大会の試合を放送していた。

実際にテニスをするという面では、まず学校体育の中にテニスが種目の一つとして取り上げられていること、また公園などには必ずテニスコートがあり、家にテニスコートがあるということも多いうことで、誰でも気軽にテニスをする環境があることなどからも、テニスの一つの文化として国民の生活に根付いていると感じられた。

このようないつでもテニスに接することができるという文化的な背景と、テニス・オーストラリアによる各種強化事業（ジュニアの海外遠征など）の展開により、オーストラリアには有望なジュニアをトッププロへと育成していくという、国として競技力を向上するために必要なシステムが確立されているといえるだろう。

日本においても、現在日本テニス協会の主導でジュニアからトッププロへの育成を目指す「一貫指導システム」の構築を図っている。しかし日本ではテニス協会によるジュニア育成と、高体連や中体連を中心とする「学校テニス」による選手の育成との間に十分な協力関係ができていない感があり、両者の協力関係を構築することが先決であると考えられる。

## 競技力向上のコーチング

Barclay Academy はこれまで多くのトッププロを輩出しており、その指導力には定評がある。Macquarie University のテニスチームも、オーストラリアの InterVersity (大学対抗戦) のテニス部門で優勝している。それらのコーチングの実践について調査することで、本学の競技力向上に大いに貢献できるものと思われる。

滞在中は同アカデミーのヘッドコーチであるデイビットのコーチングを受ける機会を得た。実際の練習内容としては特別なメニューというものはなく、一般的に行われているものがほとんどであった。デイビットとの話の中でも、「特別なことはしていない」ということであった。

ではなぜオーストラリアからは世界のトップで活躍する選手が次々に輩出されるのだろうか？一つにはグランドスラム大会を開いている環境という面はあるだろうが、私はもう一つ違う面から考えてみた。それは前述の大会観戦を「楽しんでいる」雰囲気と共通している。

アカデミーで行っている練習や大会会場で感じた雰囲気、また大学周辺やその他の場所で感じた市民の雰囲気に共通して感じたのは「陽気さ」であった。オーストラリアは元々移民によって建国された国であるということから、開拓精神が旺盛であるといわれている。そういった気質が至るところで感じられ、またそれがスポーツをする上では重要なことであると感じられた。いわゆる日本人気質といわれている「真面目さ、勤勉さ」も大切なことであると考えるが、スポーツの場面ではそれだけではうまくいかないとも感じる。

練習(トレーニング)をする際には「真面目」に行くのは大切であるが、試合の場面ではその「真面目さ」ゆえ失敗することを必要以上に気にするような、ネガティブな思考をするタイプが多いということが考えられるからである。その逆にオーストラリアの人々のような「陽気な」考え方によって、試合場面においてもいわゆる「ポジティブ・シンキング」が自然にできるのではないかと考えられるのである。これらの考察は今回の派遣だけで結論づけられるものではないが、今後も引

き続き考えていきたいテーマである。

人口約2000万人、日本のおよそ6分の1の人口しかない国から、なぜこれほど多くのトップ選手が輩出されるのか。環境の違いもさることながら、スポーツに対する、テニスに対する文化的な違いを感じた今回の派遣であった。



図8 Barclay Coaching Academy のヘッドコーチ・デイビット(右端)と留学中の日本人選手、ならびに現地ジュニア選手

## 参考

Tennis Australia : <http://www.tennisaustralia.com.au/>  
天野和彦, 八代勉, 柳沢和雄 : テニスコートにおける使用料の研究, テニスの科学, vol.9, pp58-62, 1999